

# SUNDAY NIKKEI

横浜市港北ニュータウン。ショッピングセンターにも直結する市営地下鉄のセンター北駅を出ると、細長い階段の建物がすぐ目の前に見える。知的障害者を抱える家族などが暮らす「みんなの家」だ。

建物は住居のほか、軽度の知的障害者が支援を受けながら暮らすグループホーム、地域の人の交流室なども備える。

住民は主に障害者を抱える家族だが、健常者だけの世帯も入居。グループホームも含めて住民同士でハイキングに出掛けたり、掃除や重い荷物の運搬で助け合ったりと、近所付き合いが盛んだ。交流室では、障害の有無や年齢にかかわらず地域のだれもが参加できる音楽や絵画などの教室が毎日のように開かれる。

住民の一人で障害者を抱える母親は「お隣に『ちょっと助けて』と言って、けれど、ただたない環境がここにはある。とても満足している」と話す。

## 障害者もいる家族のマンション 近所付き合いが盛ん

そもそも障害児を持つ主婦、中村真知子さん(60)の将来への不安がきっかけだった。2000年ごろ、親の介護の問題が起り、自分たちが年老いたときの子供のことも心配になった。「同じ問題を抱える人たちが一緒に住み、助け合ってはどうか。そう考えて一人で様々な施設の見学や情報収集を始めた。そのうちに障害者を抱える家族や、そうでなくても関心を持つてくれる家族の輪ができてきた。2年後には社会福祉法人や建築士などもボランティアで参加し「みんなの家をつくる会」が発足した。04年には土地も見つかり、入居



**みんなの家の概要**  
 ①所在地 横浜市都筑区  
 ②建物概要 地上5階地下1階、個人住戸6戸(45~65平方メートル)、グループホーム、地域交流室、居宅介護支援センターがある  
 ③総工費 約2億7000万円(土地代含む)、管理費など月1.5万~2万円

# 共同住宅 自ら築く

## 市民やNPO、望みの形で

障害があっても、高齢でも、住民が支え合いながら安心して暮らせる住まい。そんな共同住宅を一般の市民や特定非営利活動法人(NPO法人)が一からつくり上げる動きが少しずつ広がっている。行政や業者頼みでは本当に自分たちが望む住まいは実現しないからだ。簡単ではないが、あなたにもできるかもしれない。

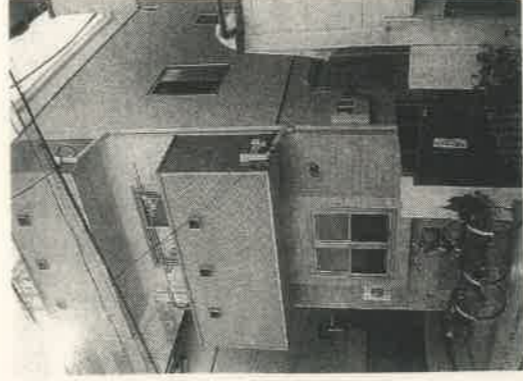
東京都渋谷区 恵比寿駅から徒歩8分という一等地に10年4月オープンした「ばれっこの家 いここと」。ここは一人暮らしの障害のある人、ない人が集まって暮らす賃貸住宅だ。外見は普通の民家。現在、公募で集まった知的障害がある人4人、健常者3人が暮らす。

この住宅を発売し運営しているのは知的障害者の生活を支援してきたNPO法人「ばれっこ」家賃は月7万円前後。共用部分の掃除など共同生活のためのルールは月に1回程度入居者が集まって決める。

### 障害ある人も一人暮らし

## 健常者と助け合い

「身の回りのことはできる軽度の知的障害者でも完全に一人暮らしをするのは不安。なるほんの少し背中を押すという意味で、いろいろな人に共に支え合って暮らす家が



**ばれっこの家 いここととの概要**  
 ①東京都渋谷区  
 ②地上3階建て、居室8室(約6畳)、共用の台所、居間、トイレ、風呂などがある  
 ③約4700万円(土地代は除く)、入居者の家賃は月6.9万~7.3万円、敷金2カ月分、礼金なし

あってもいいのではないかと。法人には財政的な余力はなく、以前から活動に協力していた株式会社「東京木工所(東京・渋谷)が所有地を提供、4000万円程度かかる

建物も建ててくれることで可能となった。NPO法人が建物を一括して借り上げ、家賃収入で建設費を返済する。設備・備品にも700万円以上がかかったが、これらは区や東京都共同募金会からの補助金、NPO法人からの補てん、寄付金などで賄った。

障害を持つ入居者の一人(47)は「みんなほぐり帰宅時間が遅いので寂しい面もあるけど、ここは楽しい」と話す。谷口さんは「ここを一つのモデルとして各地によい住まいをつくらせてほしい」と話している。

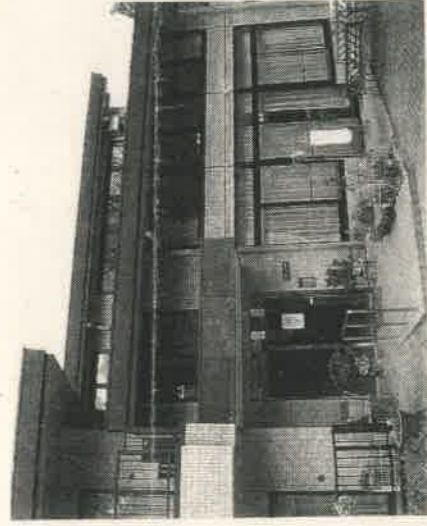
同法人の理事長、古居みづ子さん(56)が「介護が必要になる前の高齢者対象とした、健康が維持できる住まいが必要」と考えていたところ、所有地に高齢者施設の建設を希望していた家を紹介され、計画が動いた。ただ珍しい住宅だったため約1億円の建設費調達は難航。一家との付き合いがあった隣協からの融資で実現にこぎ着けた。

## 高齢者向け賃貸タイプ 健康維持に一役

平均5000万円の費用を負担する形で落ち着いた。ただグループホームや地域交流室分をどう賄うかが苦労した。

結局、これらはNPO法人みんなの家を設立し、そこが所有者となって融資などで資金を調達した。社団法人の口添えもあって地元の信用金庫から5000万円弱を借りたほか、横浜市社会福祉協議会や入居者からも借り入れ、寄付も合わせてなんとか帳尻を合わせた。グループホームの運営を委託した社会福祉法人からの賃料や、交流室での各種教室の参加料などで返済する。「赤字にならないギリギリの計画(中村さん)という。

1999年開設した「シャロームつきみ野」はその先駆けの一つだ。台所、風呂、トイレが付いている住戸、共用の食堂などを備える。昼食、夕食



### シャロームつきみ野の概要

①神奈川県大和市  
 ②地上2階建て、住戸14戸(28~52平方メートル)、共用の食堂兼多目的室などがある  
 ③約2億円(土地代除く)、入居費用は40平方メートルの部屋に75歳以上が入居する場合で、一時金420万円、家賃・管理費月額9万5000円(他にも様々な支払い方式がある)

一般的に、高齢者や障害者も安心して暮らせる共同住宅をつくることは並大抵ではない。しかし実現した人たちがいる。その人たちに秘訣を聞くと「大切なのは仲間づくり」と口をそろえる。やはり、「個人だけの方では限界がある」(NPO法人福祉マンションをつくる会の井上亮子理事長)。

市民によるまちづくりを支援しているNPO法人まちぼっこの辻利未事務局長

## 大切なのは仲間づくり

「最大の問題は資金だが、その面でも仲間を増やすことは調達手段の多様化につながる」と話す。

つづいた後にも課題はある。「みんなの家ではこの住まいを若い世代にどう引き継いでいこうか考えないといけない」(住民の一人でNPO法人理事長を務める川西利明さん)という。それぞれの住宅で入居者が

抜けたときも心配だ。とはいえ、このような取り組みで高齢者や障害者が生き生きと自立した生活ができるようになれば、社会保障制度などの負担も軽減できる。開設資金を公的支援制度を拡充していくことは検討に値しそうだ。

(編集委員 山口聡)